Japan society of Home Economics

日本家政学会誌　Vol. 50　No. 1　5～10（1999）

高齢期の配偶者との関係性ステイタスと孤独感
—モラールとの関連性—

宇都宮　博
（広島大学教育学研究科）

原稿受付平成9年11月17日；原稿受理平成10年9月25日

Marital Relatedness Status and Loneliness in Old Age
—In Relationship to Morale—

Hiroshi UTSUNOMIYA
Graduate School of Education, Hiroshima University, Higashi-Hiroshima 739-0036

The purpose of this study is to examine the relationship between the marital relatedness status and the loneliness in the old age. A questionnaire of the loneliness scale (LSO), P.G.C. Morale Scale, and the marital relatedness status SCT were administered to 166 elderly people (86 males and 80 females). LSO consists of two subscales, U-scale (to measure mutual sympathy), and E-scale (to measure awareness of individuality). Subjects were classified into six statuses (by Utsunomiya, 1996), and Relatedness Achiever and Superficial Relatedness were compared in terms of dyadic adjustment. On the above scales, the pattern of correlation between self and spouse varied by status. Based on this result, the meaning of loneliness in marital life was discussed.

(Received November 17, 1997; Accepted in revised form September 25, 1998)

Keywords: old person 高齢者, marital life 結婚生活, relatedness status 関係性ステイタス, loneliness 孤独感, morale モラール, adjustment 適応.

1. 序　論

高齢期の孤独感は，それまでの人生で具体的に交わされてきた他者との相互交渉が反映されたものである．彼らの孤独感において，配偶者との結婚生活の質はどのような意味を有しているのであろうか．結婚生活の質は様々な側面をもつが，とりわけ何が結婚生活を持続させているのか，すなわち配偶者との関係を継続させる要因は注目に値する．この種の研究は，すでに欧米においていくつか先行研究が見られる．

これらの研究からは，結婚の機能的メリットや離婚すべきではないといった規範よりも，配偶者の人格や関与し合うこと自体に高い価値を見出す方が，結婚生活への長期的適応にとって重要であることが示唆されている（たとえば，Robinson and Blanton 1993；Swensen and Trahaug 1985）．しかし従来の研究では，これらの問題を高低の1次元でとらえる傾向があり，個々の配偶者に対する関係性の多様さをとらえるには不十分であると思われる．

そうした状況をふまえ，宇都宮（1996 a）は配偶者との関係性を発達的視座からとらえる必要性を指摘している．さらに，関係性発達の力動的側面を視野に入れた，関係性ステイタスという枠組みを提案している．それによれば，配偶者との関係性としては図1に示す六つのステイタスが導きだされる．

ステイタスの発達経路は，まず配偶者の存在意味を人格レベルからとらえる必要性・重要性を認識しているか否かによって分岐する．このことを意識する者は，さらに配偶者の存在意味を主体的に探求した上で，全人的にその価値を見出し，代替できない存在とみなしている「関係性達成型」，人格レベルから意味付けることの必要性を認知しながらも，まだ模索体験から抜けきれずにアンビバレントな状況のままでいる「献身的関係性型」，かつては配偶者の存在意味について模索したことがあったが，中途半端な解決で終了させ，現段階では配偶者に中立的な見解を有する「妥協的関係性型」，存在意味を探求した末，否定的な結論に達している「関係性拡散型」とに分類される．

一方，人格レベルから存在意味を探求していない者

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

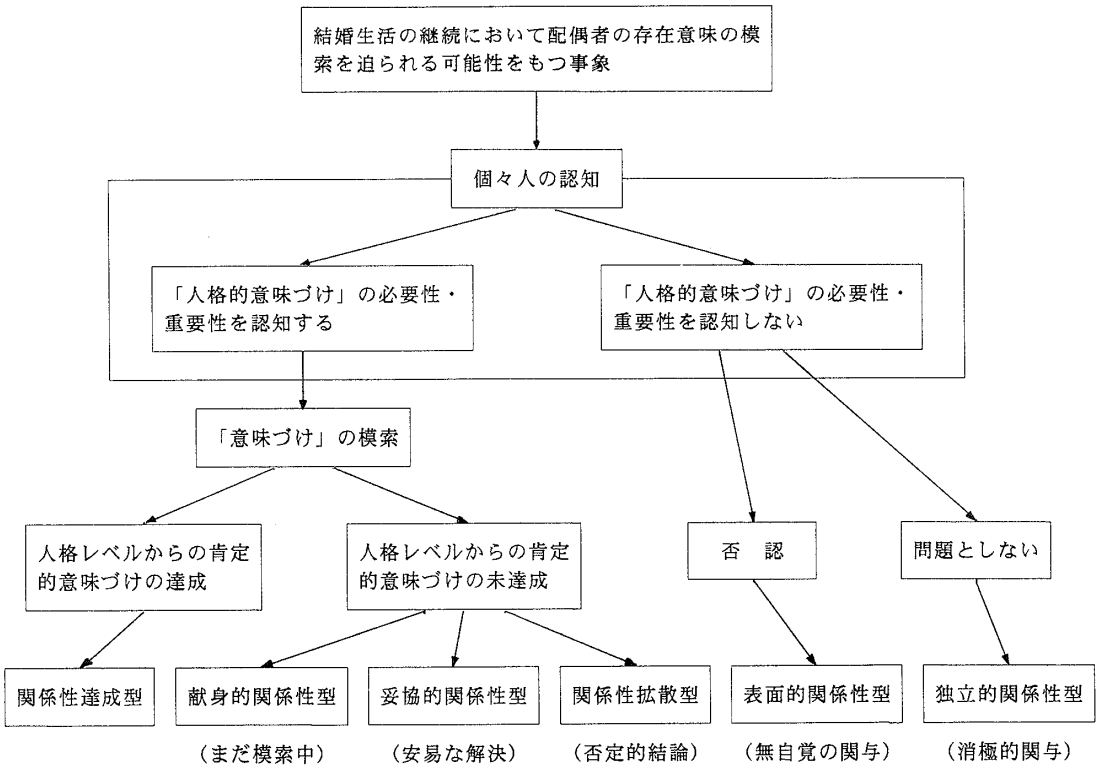

図 1．関係性ステイタス発達経路の図式

には，結婚生活を肯定的にとらえているものの，人格的意味づけという視点を明確に意識化できていない「表面的関係性型」と，その視点は認識していながらも，もともと配偶者に対して人格レベルからの関わりを期待していない「独立的関係性型」とに分かれる．

宇都宮（1996 b）では，ステイタスと結婚生活の満足感および過去の夫婦人生の受容との関連が実証的に検討され，関係性ステイタスの構成概念の妥当性が示唆されている．またこの研究から，関係性達成型が結婚生活に最も適応的であることが明らかとなった．

そこで本研究では，高齢期の既婚者において，配偶者との関係性ステイタスが，孤独感とどのような関連を有しているか探求したい．孤独感の指標は，これまで単一次元の尺度と多次元から構成される尺度とが開発されているが，本研究では落合（1983）によって開発された孤独感尺度 LSO を用いる．本尺度はもともと青年期を対象に作成されたものであるが，三宅等(1997)によって高齢期の孤独感を測定する上でも有効であることが示唆されている．

落合（1983）によると，孤独感は共感性（対他的次元）と個別性（対自的次元）から構成される．共感性とは他者と理解・共感する可能性についての考え方であり，個別性は自己と他者とが個別の存在であると自覚している度合を意味する．

本研究では，まずこの孤独感の 2 次元が高齢期の心理的適応とどのように関連しているか検討する．この分析を通して，共感性と個別性のうち，どちらの次元が高齢期の孤独感で優勢となっているかを明確化する．高齢期の心理的適応の指標は，わが国でも多くの研究で用いられている P.G.C. モラールスケール（Lawton 1975）を用いることとした．その上で，関係性ステイタスの観点から孤独感の 2 次元を比較検討し，各ステイタスの孤独感の様態について考察する．

2. 方　　法

(1) 対 象 者

自己と配偶者の少なくとも一方が 60 歳以上か，結婚年数が 30 年以上の有配偶者 166 名(男性：86 名，女性：80 名)．対象者の平均年齢は 67.3 歳（SD＝6.28）で，その配偶者は 66.9 歳(SD＝6.19)であった．また結婚年数は，平均 41.6 年（SD＝7.27）となっていた．

(2) 測 定 法

以下の内容からなる質問紙調査を行った．

1) 関係性ステイタス評定用 SCT（宇都宮 1996 b）

12 項目（たとえば，「妻（夫）の存在は，私の人生において____」「私は，夫（妻）としていつも____」）

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表1．各ステイタスの様態とSCTの反応内容例

	配偶者の存在の意味づけ	積極的関与	典型的な反応 (SCT「妻（夫）の存在は私にとって」)
(a) 関係性達成型	模索体験あり →人格的肯定	している	かけがえのない存在である 最愛の人である
(b) 献身的関係性型	現在模索中 (アンビバレント)	している or しようとしている	悩まされることもあるが大切な存在 時々，不安にさせられることがある
(c) 妥協的関係性型	模索体験あり →中立的	していない	今はあまり重要ではない 生活が安定しているのでよしとしよう
(d) 関係性拡散型	模索体験あり →否定的	していない	できれば離婚したい まったく無意味な存在である
(e) 表面的関係性型	模索体験なし (機能的肯定)	している	よく自分のために尽くしてくれる 役に立つアシスタント的存在
(f) 独立的関係性型	模索体験なし (中立的)	していない	特別な意味はない 可もなく不可もない

からなり，評定マニュアルに基づき，反応内容を総括して最もふさわしいと思われるステイタス（関係性達成型，献身的関係性型，妥協的関係性型，関係性拡散型，表面的関係性型，独立的関係性型のいずれか）に評定される．評定の信頼性は，3名の評定者の一致率によって検討した．3名中（うち1名は筆者）2名以上が一致した割合は95.2%であった．なお一致しない箇所は，協議のうえ決定した．各ステイタスの反応内容例は，表1に示すとおりである．

2） 孤独感尺度LSO（落合 1983）

共感性尺度LSO-U 9項目（たとえば，「人間は，他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができると思う」「私は，私の生き方を誰かが理解してくれると信じている」）と個別性尺度LSO-E 7項目（たとえば，「人間は，本来ひとりぼっちなのだと思う」「どんな親しい人も，結局自分とは別個の人間であると思う」）からなる．5件法による．LSOを高齢者に適用するため，全16項目について，因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ，2因子が抽出された．各因子の寄与率は，23.3%と15.1%である．3項目は両因子次元への因子負荷量が低かったために除外したが，因子Ⅰと因子Ⅱは落合（1983）の研究で見出された項目配分とほぼ匹敵するものであった．Cronbachのα係数は0.86と0.71であった．そこで，前者9項目の加算平均値をLSO-U得点，後者4項目の加算平均値をLSO-E得点とした．なお，除外された項目はすべて落合（1983）のLSO-Eに該当していたものである．

3） 改訂版P.G.C.モラールスケール（Lawton 1975）

17項目からなる．2件法による．本尺度は，わが国においてもいくつかの研究で，高齢者の主観的幸福感の指標として用いられている（たとえば，長田と長田 1994；下仲等 1990）．全17項目について，項目-全体相関を算出したところ，1項目において有意な相関がみられず，他の項目はすべて0.41から0.64の範囲で有意な相関を示した．そこで，この項目を除外し，他の16項目の加算平均値をモラール得点とした．Cronbachのα係数は0.80であった．

(3) 手続き

1996年7～9月に，広島県内の高齢者大学受講者に質問紙の入った封筒を配布し（配偶者用も同封），自宅に持ち帰って記述してもらった．なお，対象者166名のうち，124名（62組）は夫婦での協力である．

3. 結　果

(1) 各変数の相互関連性

本研究で用いた各変数の相互関連性を明らかにするため，各尺度間のピアソン相関係数を算出した．その結果，孤独感尺度の下位尺度すなわちLSO-UとLSO-Eとの間には，有意な負の相関が見出された($r=-0.29$, $p<0.001$)．また，LSO-Uにはモラールとの間で有意な正の相関が確認された（$r=0.19$, $p<0.05$）．LSO-Eとモラールとの間には相関がみられなかった．

続いて，共感性・個別性とモラールの関連性について，より詳細な情報を得るため，LSO-U・LSO-E得点の高群（第三四分位数以上），低群（第一四分位数以下）をそれぞれ抽出し，モラールの平均得点を比較検討した．なお，LSO-U得点の高群は15点以上，低群は5点以下で，一方LSO-E得点の高群は6点以上，

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

低群は0点以下である．

各群のモラール得点は，表2に示すとおりである．LSO-Uの高群・低群，LSO-Eの高群・低群ごとに，t検定によって，モラール得点の平均値の差を検討したところ，LSO-Eでは高群と低群との間に有意差がみられなかったが，LSO-Uでは高群が低群よりも有意に高得点を示した．

(2) ステイタスの人数分布

各ステイタスの人数分布は，関係性達成型55名（男性32名，女性23名），献身的関係性型7名（男性0名，女性7名），妥協的関係性型18名（男性6名，女性12名），関係性拡散型9名（男性0名，女性9名），表面的関係性型65名（男性39名，女性26名），独立的関係性型12名（男性9名，女性3名）であった．

(3) 各ステイタスのLSO-U・LSO-E得点

まず，男女別にLSO-UおよびLSO-Eの平均得点を求め，それぞれt検定（5%水準）を行った．その結果，LSO-Uにおいて有意差が認められた（女性＞男性）．そこで次に，各ステイタスごとに性差があるか検討することとした．この分析では，男女ともに比較的多く分布する関係性達成型と表面的関係性型で検討することが可能であると判断し実施した．分析の結果，ともに有意差は認められなかった．したがって，少なくとも配偶者の存在を肯定的に意味づけているステイタスでは，性差がないことが示唆された．

以下の統計処理による分析では，少数のステイタスが存在することをふまえ男女合わせて分析を進めていくが，今後残りのステイタスについても，性差を検討していく必要があると考えられる．なお，ステイタス間における平均得点の比較検討についてであるが，特に人数の少ないステイタスについては考察を慎重に行う必要がある．そこで本研究では，関係性達成型と表面的関係性型を中心に分析を進めていく．

各ステイタスのLSO-UおよびLSO-Eの平均得点は，表3に示すとおりである．ステイタスを独立変数，LSO-U・LSO-E得点を従属変数とする一要因分散分析を行ったところ，LSO-Eにおいてステイタスの主効果が認められた．しかしながら，Tukey法による多重比較ではいずれのステイタス間も有意でなかった．

モラールについても，同様にステイタスを独立変数とする一要因分散分析を行った．その結果，ステイタスによる主効果が認められた．多重比較（Tukey法）を行ったところ，関係性達成型と表面的関係性型が関係性拡散型よりも有意に高得点を示した．

(4) 関係性達成型および表面的関係性型とその配偶者との間における相互性

これまで検討してきた個人レベルの分析では，配偶者の存在を肯定的に意味付けている点で共通の関係性達成型と表面的関係性型には，それほど明確な差異は認められていない．そこで次に，配偶者との相互性という観点から検討することとした．

これまでの分析で用いられてきた関係性達成型55名と表面的関係性型65名のうち，それぞれ48名と45名はカップルでの協力が得られている．彼らのデータをもとに，各ステイタスとその配偶者との間で，LSO-U・LSO-E得点およびモラール得点それぞれの相関と平均値の差を検討した（表4）．

表2．LSO-U・LSO-Eの各高群・低群におけるモラール得点の平均値（SD）

LSO-U		t値	LSO-E		t値
高群	低群		高群	低群	
12.26	10.82	2.15*	11.33	11.60	0.38
(2.64)	(3.69)		(2.86)	(3.55)	

*$p<0.05$.

表3．各ステイタスにおけるLSO-U・LSO-E得点，モラール得点の平均値（SD）

	関係性達成型	献身的関係性型	妥協的関係性型	関係性拡散型	表面的関係性型	独立的関係性型	分散分析 F値
LSO-U	10.89	7.00	10.53	9.11	9.05	6.00	1.69
	(5.54)	(6.08)	(6.36)	(6.60)	(6.47)	(6.10)	
LSO-E	1.60	1.43	4.39	4.22	2.10	3.92	2.35*
	(3.88)	(3.78)	(2.97)	(3.11)	(4.25)	(3.42)	
モラール	12.08	10.07	9.69	7.44	11.77	10.59	5.12***
	(3.14)	(3.59)	(3.89)	(2.60)	(2.72)	(3.22)	

*$p<0.05$, ***$p<0.001$.

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表4．関係性達成型および表面的関係性型とその配偶者間における LSO-U・LSO-E 得点，モラール得点の相関係数と平均値の差

	関係性達成型とその配偶者		表面的関係性型とその配偶者	
	相関係数	t 値	相関係数	t 値
LSO-U	0.27^{+}	0.91	0.09	−0.77
LSO-E	0.01	−1.29	0.30*	0.35
モラール	0.35*	1.41	−0.08	1.72^{+}

$^{+}p<0.10$，$^{*}p<0.05$.

その結果，まず関係性達成型とその配偶者との間には，LSO-U 得点で正の相関傾向が，さらにモラール得点では有意な正の相関が認められた．なおいずれの変数においても，配偶者との平均値の差は有意ではなかった．

それに対し表面的関係性型とその配偶者との間には，LSO-E 得点で有意な正の相関が確認された．またモラール得点では，表面的関係性型がその配偶者よりも有意に高い傾向が示された．

4. 考　察

まず高齢期の孤独感の一般的傾向についてであるが，本研究ではその指標として，共感性（対他的次元）と個別性（対自的次元）から構成される孤独感尺度 LSO（落合 1983）を用いた．2次元間の相関係数を算出したところ，両者に有意な負の相関が認められた．孤独感の2次元は，高齢者にとって相容れられないものと考えられる．

モラールとの相関係数では，個別性が無相関であったのに対し，共感性は有意な正の相関が示された．また，各次元の高得点者と低得点者を抽出し，モラール得点を比較した結果，個別性は高低に関わらず同程度のモラールを有し，共感性高群と低群の中間に位置していることが明らかとなった．このことは，共感性が高齢期の心理的適応と密接な関係にあることを示唆している．高齢者の孤独感においては，個別性よりも共感性の方が重要な意味を有していると考えられる．

次に，関係性ステイタスの人数分布を検討した．その結果，男女に共通して関係性達成型と表面的関係性型の占める割合が高かった．しかし，男性がこの二つのステイタスに集中していた（82.6%）のに対し，女性は他のステイタスにもかなり分布していた．こうした人数分布の差異は，先行研究（宇都宮 1996 b）でも確認されている．本研究からも，女性は男性に比べて個人差が大きいことが示唆された．以下，各ステイタスの孤独感について考察を行っていくが，本研究では結果でも示したように，人数分布の高い関係性達成型と表面的関係性型を中心に比較検討する．

ステイタスを独立変数，孤独感の2次元を従属変数とする一要因分散分析を行ったところ，いずれにおいても各ステイタス間で有意差は確認されなかった．ところで，円満な結婚生活と認知している点で共通の，関係性達成型と表面的関係性型は，ともに個別性が低く示された．しかし，この結果から，両者の個別性を安易に同質と結論づけるのは危険であろう．すなわち，図1に示した関係性の発達経路との関連に着目する必要がある．各ステイタスの発達経路から，表面的関係性型は個別性の問題をあいまいなままにし，無自覚なままに今日まで至っていることが考えられる．それに対し，関係性達成型は個別性を自覚し，別個の存在だからこそ理解し合えるようにあり続けたいとする姿勢が，得点の低さに表れたと推察される．

モラールに関しても，ステイタスを独立変数とする一要因分散分析を行った．その結果，ステイタスの主効果が認められ，関係性達成型と表面的関係性型が関係性拡散型よりも有意に高得点であった．宇都宮（1996 b）による結婚生活に対する満足感の分析では，関係性達成型がすべてのステイタスよりも高得点であったが，今回のモラールでは関係性拡散型との間にのみ有意差が認められ，表面的関係性型との差は有意ではなかった．なお少数ステイタスについて，今回のデータだけで多くを語るのは危険と思われるが，関係性拡散型のモラール得点は，概して低得点域に集中しており看過できない．このステイタスは，結婚生活の満足感とともにモラールにおいても，他のステイタスに比べて著しく低かったことから，不適応性が懸念される．

ところで，これまでの分析からは，関係性達成型と表面的関係性型との間に明確な差異は見出されなかった．そこで次に，配偶者との相互性の視点から両者を比較検討することとした．それぞれ，配偶者との間で孤独感の2次元およびモラールの相関と平均値の差を検討したところ，関係性達成型では共感性で正の相関傾向，モラールで有意な正の相関がみられた．またいずれの変数も，平均値の差は有意でなかった．一方，表面的関係性型では個別性で有意な正の相関が示され，モラ

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

ールで配偶者より有意に高得点の傾向が認められた．

先の個人分析から，孤独感のうち，高齢期の心理的適応にとって重要なのは共感性だけであることが明らかとなっている．概して共感性の高い関係性達成型は，それが配偶者と正の相関傾向にあるとともに有意差がなかったことから，高いレベルで結びついているケースが多いと推察される．関係性達成型のカップルレベルでの適応性の高さは，モラールが正の相関にあった点と，配偶者との差異が有意でなかった（概してともに高い）ことからもうかがえる．

対照的に表面的関係性型では，こうした傾向が認められなかった．先の個人分析で，表面的関係性型の個別性は低く示されたが，カップルで正の相関があるとともに有意差がなかったことから，その傾向は配偶者にもうかがえる．したがって，表面的関係性型の個別性は，低いレベルで配偶者と結びついているケースが多いと考えられる．

さらに注目すべきは，表面的関係性型とその配偶者のモラール得点に傾向差が認められた点である．この結果は，関係性達成型と表面的関係性型とで，配偶者の適応度が異なることを示唆している．表面的関係性型は，個人レベルでは関係性達成型と同様に適応的といえるが，配偶者との相互性では関係性達成型と性質を異にしていたわけである．

以上より，高齢期の孤独感において重要な意味を有する共感性とモラールを，カップルレベルで高く持続させるには，配偶者の存在を絶えず人格レベルから価値づけながら，積極的に関与しつづける姿勢が大切であることが検証されたと考えられる．

5. 結　論

本研究では，各ステイタスの孤独感の特徴を，モラールとの関連を通して検討してきた．基本的には高齢者のモラールにとって，孤独感は個別性の次元よりも，共感性の次元の方が重要な要因であった．

ステイタスと孤独感の関連性の分析では，関係性達成型と表面的関係性型を中心に比較検討された．両者は，個人レベルでは比較的類似した傾向を示した．しかし，配偶者との相互性のあり方には，両者に顕著な差異が認められた．結論として，高齢期の孤独感において重要とされる共感性とモラールを，自己と配偶者がともに確保するには，結婚生活の継続の中で相手の人格を尊重した関わりを持ち続ける姿勢が大切であると考察された．

最後に，本研究の問題点をふまえ，今後の課題を指摘したい．まず，本研究では関係性達成型と表面的関係性型以外は該当者が少なく，十分な分析ができなかった．したがって，すべてのステイタス間の比較検討は今後の課題として残された．また，質問紙の配布場所が高齢者大学であった点も看過できない．今後よりさまざまな属性の者を対象に，今回の調査で得られた知見の妥当性を検証していく必要がある．

ところで，高齢期既婚者に大きな衝撃を与えるライフイベントとして，配偶者との死別がある．こうした状況に直面したとき，個別性の真の強さが問われるだろう．したがって，個別性の問題は，今後さらに実証的研究によって検討していく必要がある．特に，各ステイタスの個別性がどういう過程を経て，現在の様態に至っているかを明らかにするには，本研究で採用した質問紙法だけでなく，半構造化面接による測定法も開発して調査を進めていくことが期待される．

本論文をまとめるにあたり，広島大学教育学部助教授岡本祐子先生に懇切丁寧なご指導をいただきました．深く感謝いたします．また，快く調査にご協力くださった広島県健康福祉センターと福山市老人大学の先生方ならびに調査対象者の皆様に厚くお礼申し上げます．

引　用　文　献

Lawton, M. P. (1975) The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A Revision, *J. Gerontol.*, **30**, 85-89

三宅俊治，久世淳子，谷口俊治（1997）高齢者における不安について(9)—孤独感と不安3因子の関連について—，日本教育心理学会第39回総会発表論文集，広島大学，広島，154

落合良行（1983）孤独感の類型判別尺度（LSO）の作成，教育心理学研究，**31**，332-336

長田由紀子，長田久雄（1994）高齢者の回想と適応に関する研究，発達心理学研究，**5**，1-10

Robinson, L. C., and Blanton, P. W. (1993) Marital Strengths in Enduring Marriage, *Fam. Rela.*, **42**, 38-45

下仲順子，中里克治，河合千恵子（1990）老年期における性役割と心理的適応，社会老年学，**31**，3-11

Swensen, C. H., and Trahaug, G. (1985) Commitment and the Long-Term Marriage Relationship, *J. Mar. Fam.*, **47**, 939-945

宇都宮博（1996 a）夫婦の関係性ステイタスと高齢期夫婦の関係性発達の検討，日本教育心理学会第38回総会発表論文集，筑波大学，茨城，51

宇都宮博（1996 b）高齢期夫婦の関係性ステイタスと夫婦適応の関連性の検討，日本家政学会第48回大会研究発表要旨集，東京家政大学，東京，103

NII-Electronic Library Service